かいぎん

エコマガ

ECONOMIC DATA & MANAGEMENT MAGAZINE
vol.259 OCTOBER 2026

10

The Voice
足元を支える仕事から
地域に根を張る企業へ
株式会社 とまとコーポレイション

KRI アウトルック
成長著しい台湾経済

地産地商
地域の宝を、世界へ。
そして未来へ。
株式会社 CAVE OKINAWA

津口
仕事が楽しそうな人、
そうでない人



那覇大綱挽 ©OCVB

OKINAWA KAIHO 海邦銀行



朝比奈寛幸税理士事務所 代表税理士、
シナリオ・プランナー、農業経営アドバイザー
朝比奈 寛幸

答えを急がず立ち止まる力

スマートフォンやAIが提示する即答は、本当に私たちが求める「正解」なのでしょうか。即時の「それっぽい回答」に飛びつかず、答えのない違和感を自分の中に踏みとどまらせる。便利さに思考を委ねる時代だからこそ、すぐ結論を出さずに醸成させる「感情の保留地」を胸に持てるかが問われているのではないでしょうか。



「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。この言葉を作った詩人であるジョン・キーツは『事実や理由に決して短気に手を伸ばさず、不確実さ、謎、疑いのなかにいることができる能力』であると説明しています。これは「答えが出ない状態や、分からないことのモヤモヤに焦らず耐えられる力」などとも言い換えられるでしょう。これと対比されるものに、「ポジティブ・ケイパビリティ（問題を処理する力）」があります。日本の教育が長年求めてきたのは、提示された課題に素早く正確な最適解を導くこの「早く正解を出せる優秀さ」を重んじる文化でした。

しかしながら、正解が決まったテストと違い、今の社会の複雑な問いに即答の方程式があるのでしょうか。

「分かりたい」という衝動

社会心理学では、曖昧さや不確実さを嫌い、手っ取り早い答えで心を落ち着かせようとする心の働きを「認知の閉鎖欲求」と呼びます。どうやら私たちは、分からないことを目の前にすると、すぐに「分かりたい」という衝動に駆られやすいようです。そう、学校教育で磨かれた優秀さと、脳の安心したい衝動が結びついた結果、私たちは「分からない」という空白にどんどん耐えられなくなっているのではないでしょうか。耐性が弱くなればなるほど、より性急に「分かろうとしてしまう」ため、自分の知っている範囲や理解できる範囲で解決し対処してしまう＝過去の経験という既知の領域で「未知」というものを収めてしまうものでしょう。本当は「分からない」はずのものが、「分かったような気になる」という状態、皆さんにも心当たりがありませんか。

「何が分かっていて、何が分からないのか」

すぐに答えに飛びついて「分かった気になる」ことの本当の怖さは、「自分が何を知っていて、何を知らないのか」の境界線が見えなくなってしまうことにあります。

約2500年も前、古代ギリシャの哲学者ソクラテスは「無知の知」―「自分は何も知らないということを知っている」状態こそが真の智慧であると説きました。今のテクノロジーにはこういったチカラを私たちから奪っている側面があります。手軽な答えで分かった気になり、「知らない自分」から目を背けるのは、思考の放棄にほかなりません。「自分はまだ分かっていない」という空白をそのまま抱え込めるネガティブ・ケイパビリティがあって初めて、私たちは本当の探求へと踏み出すことができるのです。

組織の成長につなげよう

心理学者タックマンが提唱した組織の成長段階を示す『タックマンモデル』では、成果を出す手前に必ず意見がぶつかり合う『混乱期』が存在します。この不協和音に耐えかねて安易な正解に逃げるのではなく、モヤモヤを抱えながら真の相互理解が醸成されるのを待つ「ネガティブ・ケイパビリティ」こそが、組織を次のステージへと引き上げます。

わたしはこれまでチームビルディングを意図する場をファシリテートしたり、またはされたりする現場を見てきました。自戒の念を込めて言いますが、これらの場が「お膳立てされ過ぎた環境」で行われていることが多くあると感じます。整えられ過ぎた環境下で参加者たちが気持ちよくスラスラ会話し、「快適な感想」ばかりを持って継続されていくイメージです。しかしながら、環境設定というハシゴを外されたとき、参加者たちはどうなるのでしょうか…。

取り戻すべきチカラ

混沌や対立を急いで埋め立てず耐え抜く力は、個人だけでなく強いチームを育む土壌にもなります。正解のない時代を歩む私たちに必要なのは、即答のスキルではなく、問いを抱え続ける静かな耐久力です。まずは日々の小さな違和感を消さずに留め、思考の保留を始めてみませんか。